が、今日は誰もいないようだ。史子が初めてそこに近づいていった時、彼らの一人がライターの火をつけると、周り

黄色い髪

干刈あがた

朝日新聞社

黄色い髪

千刈あがた

朝日新聞社

干刈あがた（ひかり・あがた）
一九四三年、東京生まれ。早大政経学部新聞学科中退。一九八二年『樹下の家族』で第一回「海燕」新人文学賞を受賞。『ウホッホ探検隊』『ゆっくり東京女子マラソン』が芥川賞候補になる。一九八四年度芸術選奨新人賞、一九八六年に、第八回野間文芸新人賞を受賞。
主著に『樹下の家族』『ウホッホ探検隊』『ゆっくり東京女子マラソン』『ワンルーム』『しずかにわたすこがねのゆびわ』（すべて福武書店・一部は福武文庫版も）など。

黄色い髪
定価一二〇〇円
一九八七年一二月二〇日　第一刷
一九八八年　一月二〇日　第四刷
著　者　干刈あがた
発行者　八尋舜右
印刷製本　凸版印刷
発行所　朝日新聞社
編集・図書編集室　製作・制作局　販売・出版販売部
〒104－11　東京都中央区築地五－三－二
電話　〇三－五四五－〇一三一（代）
振替　東京〇－一七三〇
© Agata Hikari 1987　Printed in Japan
ISBN4-02-255769-9

黄色い髪

初出『朝日新聞』一九八七年五月一六日～一一月一七日

カバー画・奥山 民枝　装幀・東 幸見

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

第一章　頭髪検査

店の従業員たちが「奥」と呼んでいるダイニングキッチンには、トーストの香りが漂っている。換気扇は回してあるが、空気の中にかすかに、卵を炒めた油の粒が浮かんでいるようだ。

「おはよう！」

二階から下りてきた夏実は、今日から衣替えなので白い半袖のセーラー服を着ている。

「おはよう」

スクランブル・エッグの皿を食卓に置きながら、史子は夏実の制服の胸のあたりに眼を注いだ。そろそろ夏服だからと去年のを出して着てみた時、胸が窮屈になっていたので、サイズの大きいのを新しく買ったのだ。今度のは胸のふくらみも目立たないのを史子は確かめた。

夏実は椅子の上に通学鞄とサブバッグとバドミントンのラケットを置くと、店の方へ行った。バドミントン部の朝練のある火木土曜日は、朝七時までに登校する。以前は「六時十五分に起こして」と言っていたが、最近は「六時に起こして」になった。伸び盛りのせいか、夏実は枕元で目覚まし時計が鳴り続けても、ぐっすり眠りこんでいる。はっきりと目覚めるまで、

五分か十分ほども体を揺すりながら呼ばねばならない。中学に入った時は小さい方だったのに、この春二年生の新しいクラスで席順を決めるために並んだら、真ん中よりちょっと後ろだったという。

「ねえ、親！　ちょっと来て！」

店の方から夏実が呼んだ。開け放したドアのむこうは美容院になっている。

「なんなの？」

「前髪をちょっと切ってくれない？」

四面ある鏡の一つの前に立ち、前髪を引っぱりながら夏実が言った。

「そんな、朝になってから。もう二十分前よ」

「今朝気がついたんだもの。今日、頭髪検査なんだけど、谷本先生は研修で出張だって言ってたから、もしかしたらカマイタチがやるかもしれない。ヤバイよ」

「あんた、言葉遣いに気をつけなさい。坐って！」

史子はキャビネットからタオルを一枚と、手近にあったカット鋏を取った。タオルを首に巻くと、夏実は眼をつむった。象牙色の肌に、かすかに産毛が光っている。眉が半分ほど隠れているので、眉が出るように七ミリほどカットした。

「いいわよ」

眼をあけると、丸顔に眉がくっきりして、少し気の強そうな少女の顔になった。

「サンキュー。急いで行かなくちゃ！」
夏実は食卓に走っていくと、牛乳だけをごくごくと飲み、鞄やラケットを持って、店の出入り口とは別の、路地へ出るドアを開けた。冬の午前七時は、学校とはいえセーラー服の少女を一人で歩かせるのはどうかと思うような薄暗さだったが、六月に入った今は、隣家のブロック塀の上に陽が射している。
夏実は朝の光の中を駆け出していった。まだシャッターの閉まっている〈柏木美容院〉の隣は、朝五時半から店を開けている〈おはようベーカリー〉。
「いってらっしゃーい」
おばさんが自動販売機の所に空き缶入れのダンボールを置きながら言った。夏実はラケットを振り上げて答えながら、さらに速度をつけた。その通りにはその二軒の店が並んでいる他は、ぽつりぽつりと店があるだけだ。前の方を走っていく男子生徒がいる。やはり今日から白の半袖ワイシャツで、頭はスポーツ刈り。つぎの角からセーラー服の少女が一人走り出てくると、夏実を見てハッとしたように立ち止まり、大きな声で言った。
「先輩、おはようございます！」
「いいから、早く行こう」
同じラケットを持っている少女は並んで走った。この春中学生になったばかりの一年生は、まだ小学生のように小さい。夏実は少し速度を落とした。住宅街のブロック塀からのぞいてい

る樹々の葉は、まだ柔らかいので、朝陽に若緑色が透けている。二人が角を曲がってバス通りに出た時、もう一人のセーラー服の少女が走ってくるのが見えたので、夏実は止まった。一年生も止まった。

「先輩、おはようございます！」

「先輩、おはようございます！」

三年生の少女は黙って走り過ぎた。そのあとから二人も走った。学校の塀にさしかかった。門の少し手前から二人は歩いた。門の前に紺色のジャージー上下を着た、体格の良い先生が待ち構えるように立っている。夏実がカマイタチと呼んだ、生活指導の鎌田先生だ。正規の登校時間ではなく、朝練のための早朝登校なので、生徒の生活委員はまだ立っていない。前を走っていた二人、むこうから走ってきた数人が、校門の前で姿勢を正し、大声で挨拶してから入っていった。

鎌田先生が腕組みをして、重々しく「おはよう」と言った。夏実は先生の眼を見ずに、すでに気持ちは校舎の方に向いているといった視線で、決められた挨拶をした。

「おはようございます！」

「おはようございます！」

一年生も同じ言葉を言ってから、二人は霞市立第四中学校の正門の前で足を揃え、数メートル先に玄関の見える校舎にむかって、大きな声で挨拶した。

「お願いします！」
「お願いします！」
そして夏実は頭を下げた。一年生も頭を下げた。それから二人は並んで学校の構内に入っていった。夏実は息を弾ませながら、少し笑って横にいる一年生に言った。
「間に合ってよかったね」
一年生も荒い息遣いをしていたが、頬が真っ赤で、泣き顔のように見えた。

六校時のあとの学活の時、やはり夏実の予感どおりに、生活指導の鎌田先生が二年F組の教室に入ってきた。鎌田先生は体育教師だが、クラスは受け持っていないので、欠勤や出張の先生がいると、そのクラスの学活に来ることがある。紺色ジャージーの鎌田先生の姿が廊下の端に見えただけで、生徒たちは緊張する。
「起立！」
「声が小さいなあ」と鎌田先生が言った。
「きりーつ！」日直の男子が声を震わせて言った。
全員が椅子をガタガタさせ、机の下に椅子を入れて直立した。音が静まるのを待って、また日直が言った。
「礼！」

「おねがいしまーす！」教室の全員が合唱した。
先生が「坐れ」と言うまで坐ってはいけないので、みんなそのまま立っている。
「今日は谷本先生が研修なので、私がかわりに学活をする」
しんとしていないと聞こえないような低い声だ。鎌田先生は筋骨質ではなく、肉づきのたっぷりした大きな体で、顔も下ぶくれである。
「今日は頭髪検査の日だな。それと、今日から夏服になったので、併せて服装検査もする。中央列にむかって」と手を前に出してその位置を示し、突然大声で号令をかけた。
「右むけー左」
先生は、黒板にむかって左端の最前列から検査を始めた。最初の男子の頭髪の中に指を突っこみ「よし」と言い、それから洋服を上から下へと見て、また「よし」と言った。つぎの女子生徒のところでは、髪には触らず、「よし」と言った。
「ぐるっと回ってみろ」
鎌田先生が何人目かの男子に言い、言われた生徒は一回転した。
「ズボンが太いんじゃないか？」
「一年の時は太っていたので大きいサイズのを買ったんですが、身長が伸びて痩せました！」
と回転させられた生徒が答えた。「そうか」と言っただけで、先生はつぎの女子のところへ行った。「よし」と言う声はなかなか出てこず、見られている吉田典子は下を向いている。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

「吉田、前髪が眼まで垂れてるな。自分でわかるだろう。うっとおしいんじゃないか?」
「今日行きます」
吉田典子が、一応型通り答えておくというように言った。また何人かに「よし」と言ってから、藤山里子の前に立った先生がつと手を伸ばすと、里子がおびえたように少し後ろにさがった。先生は里子の癖のある毛を引っぱってから言った。
「まあいいだろう」
鎌田先生が自分の前に立ち、その視線が注がれた時、夏実は全身が粟立つような感じがした。「よし」と言って先生は通り過ぎた。
つぎの杉浦治男は、他の男子生徒とは少し違う髪形をしている。父親の収入が不定で、子供が四人いるから、学校の言うとおりにはできませんと抗議して、母親が自分でハサミを買ってきて理髪しているのだ。先生は杉浦には「よし」とは言わず、黙って通り過ぎた。
つぎの男子の髪に右手を突っこんでから、先生は、はみ出した部分を左手で撫でつけた。
「神田、お前、塾が忙しくて床屋に行く暇もないのか?」
「今日行きます」
クラスで一番成績の良い神田隆が低い声で答えた。
先生は教卓の前に戻ると、「注意された者は、今日ただちに理髪し、明日職員室へ出頭するように」と言い、それから「藤山」と呼んだ。

「頭髪について、〈異装届〉は出してあるか？」
〈異装届〉というのは、制服をクリーニングなどに出す場合、私服着用の許可を得る届け出である。
「一年生の時……梶井先生は、出さなくて良いと言いました」
と里子は小さな声で言った。
「一応出しておくように。パーマをかけてあるように見える女子の頭髪や、脱色したり染めているように見える頭髪については、生まれつきであるという旨を書いて出すように入学準備説明会でも保護者に伝えてある」
「はい」と里子がまた小さな声で答えた。
「それから、今日はいなかったが、普段、上履きのカカトを踏んでいる者は、上履きを見れば一目でわかる。このクラスにも何人かいたから、今後注意して見ることにする。以上、学活終わり」
「きりーつ！」とまた日直が大きな声で言ったが、全員は立ったままなのだ。夏実は笑いそうになったので下を向いた。
「礼！」
「ありがとうございました！」
また全員が合唱した。先生が出ていくと、教室がざわめいた。「やってらんねえよなあ…

…」と誰かが言った。男子の声だった。
通学鞄を脇に抱えた吉田典子が、夏実の二つ前の藤山里子のところに来て、癖のある毛の前髪を引っ張って言った。
「藤山さん、私はこれから前髪を切りに行くから、トイレの掃除当番やっといてよね。あんたの方が本当は長いのに、むかつく」
そして返事も聞かずに教室から出ていった。吉田典子にいつもくっついている何人かも一緒に出ていった。クラスの殆ど全員がそれを見ていた。
小学校の時も何度か同じクラスで、一年生の時も同じクラスだった柏木夏実は、トイレの掃除当番を押しつけられた藤山里子のところへ行って肩を叩いた。
「私が一緒にやるから」
「やることねえよ。放っときゃいいんだよ、な?」
小柄でヒョーキンな水野徹が周りに同意を求めるように言ったが、誰も返事をしなかった。夏実は何人かの女子が、自分を皮肉のこもった眼で見ているのを感じた。良い子ぶって、とか、そこまでやることないんじゃない、やるなら藤山さんがやればいいのよ、というような。夏実はこう思ったのだった。もし今、藤山里子が掃除当番をしないで帰ったら、明日またいじめられるだろう。きっと里子はそれをおそれて、一人でみじめな思いをしてでもやるだろう。だから自分がちょっと声をかけて、手伝ってやればよいのだと。

里子と夏実は教室に鞄を置いて、一緒に女子トイレに行った。歩きながら里子が小さな声で「ありがとう」と言った。

一番奥のドアの中に、バケツやデッキブラシや吸引器や鉤棒が入っている。夏実がバケツに水を汲んで、便器の周りに少しずつ流し、里子がその先その先のタイルをデッキブラシで磨いた。四つのトイレを磨き終わると、外のタイルを洗い流しながら、夏実が里子にささやいた。怖いという噂のある吉田典子のグループに聞かれると「ヤバイ」ので、やっぱり声が小さくなったのだ。

「もう一人の掃除当番、誰だったのかな?」

「さあ」

「きっとあのグループの一人だね。五分か十分のことなのに、むかつくのはこっちだよ。さ、道具をしまって、手を洗って、さっさと帰ろう」

流しの蛇口のところにミカンの網袋に入れて吊るしてある石鹸で手を洗いながら、里子が溜息をついた。そんな溜息をつくからいじめられるんだ、と夏実は少し苛立った。その時、流しの排水口がごぼごぼと音を立てた。水が流れ落ちずに、ステンレスの流しにたまっている。

「何か詰まってるみたい」

里子が初めてハッキリしたことを言い、排水口に指先を入れて何かをつまみ出した。それを見て、二人は顔を見合わせた。タバコの吸い殻だった。

「もっと詰まってる？」
夏実は、体育館の裏にタバコの吸い殻が落ちていた、という注意事項は聞いたことがあったが、見たのは初めてなので声が震えてしまった。
「……みたい」
「鉤棒を持ってくる」
夏実は一番奥の清掃具入れから鉤棒を取ってくると、排水口に差し込んで掻き出してみた。吸い殻が数本出てくると、たまった水が排水口にむかって流れ出した。
「あとは水で流そうぜ。スリルだなあ」
夏実は水道の蛇口をひねり、勢いよく水を流した。ステンレスにくっついていたタバコの屑が、水と一緒に排水口に落ちていった。二人はまた手を流い、女子用トイレから出た。
「誰にも言わない方がいいかしら」
と里子が小さな声で言った。夏実は里子が小さな声で物を言うたびに、苛立ちが募るような気がして黙っていた。教室から鞄を取ると、一緒に帰ろうとも言わないのに、里子は一緒に並んで歩いた。夏実は校門を出るまでずっと口をきかなかった。校門を出てしばらく歩くと、深呼吸して言った。
「あーあ、学校を離れるとホッとする。ボクは広ーい地平線が見たいなあ」
「ボクって言うの？」

と里子が聞いたので、「じゃ、さよなら」と夏実は駆け出した。半袖から出た腕に、風が気持ちよかった。

翌日の学活は、クラス担任の谷本先生だった。去年結婚して、まだ子供はいない英語の先生である。先生は真剣な顔をして教卓の前に立つと、教室を見回して聞いた。

「女子用トイレの昨日の掃除当番は誰ですか?」

掃除をしたのは自分と里子だが、当番は吉田典子ともう一人の誰かだから、手を上げちゃマズイと夏実は思った。里子が上げるんじゃないかとはらはらした。里子は二列前にいるので合図もできない。彼女が振り返るのもマズイので、夏実は困った。左前方で吉田典子が手を上げた。

「タバコの吸い殻はどこから出ましたか?」

と先生は聞いた。吸い殻のことが、なぜわかったのだろうと考え、夏実はハッとした。あの吸い殻を里子がどこに捨てたのか、気がつかなかった。きっと、流しの下の屑入れの缶に何気なく捨てたのだろうと思った時、夏実はまた里子に苛立ちを感じた。

先生の質問に吉田典子は困っているだろうが、紙に書いて回すわけにもいかない。昨日、典子が里子に掃除当番を押しつけたのは、クラスの半分以上は知っているから、面白そうに事の成り行きを見守っているようだ。ややあって、典子が前に向いたまま答えた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo